

聖書：マタイ 9：1～8

説教題：罪を赦す権威

日時：2019年1月20日（朝拝）

ここのところイエス様の権威に関する記事が続いています。二つ前のガリラヤ湖の嵐を静めた出来事には大自然の上にも権威を持ちたもうイエス様のことが記されました。前回のガダラ人の地での悪霊追い出しの記事には霊の世界の上にも権威を持ちたもうイエス様のことが記されました。続く今日の箇所では「罪を赦す権威」を持ちたもうイエス様のことが語られて行きます。さてイエス様は舟に乗ってガリラヤ湖東岸から西岸へと渡り、ご自分の町カペナウムへと帰られました。するとある人々が中風の人をイエス様のもとに連れて来ました。中風とは半身不随あるいは腕や足が麻痺して動けない状態にある人のことです。他の福音書の並行記事を見ると、イエス様がおられた家には多くの群衆が集まっていて近づけないため、この人々は屋根に上り、天井をはがし、そこから中風の人を床に寝かせたままつり下ろしたことが書かれています。マタイはその部分は省略しています。しかし彼らの信仰を見てイエス様がみわざをなさったということは共通して書いています。この彼らとは中風の人と彼を連れて来た人たちの両方を含むと思います。彼らは、イエス様はこの病をいやしてくださると信じたから、ここまでやって来ました。イエス様はそのように信じてご自分に近づく者を決して退けられないことが、ここにも示されています。その信仰を認めて豊かにみわざをなしてください。

さてイエス様はその際、何と彼に言われたのでしょうか。おそらく人々が予想したのは、イエス様のいやしのお言葉だったでしょう。ところがイエス様の言葉はこうでした。「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。」病が癒されることを期待してやって来たのに「罪が赦された」と語られるとは一体どういうことでしょうか。この「病」と「罪」の関係については、すでに前の8章17節で見ましたので今日は詳しく繰り返しません。簡単に言えばこういうことです。それは神が造られた最初の世界に病はなく、それがこの世に存在するようになったのは人間の罪に起因するということです。病を含めて、この世にあるあらゆる困難、苦しみ、災いの根本にあるのは罪であると聖書は語ります。これはある人が病にかかったら、それはその人が何か特別な罪を犯したからだということではありませんが、病の問題は罪の問題と切り離せない関係にある。イエス様は私たちを何よりも罪から救うために来てくださったお方ですから、ただ病をいやすだけでは表面的な解決でしかありません。そういうお方として、より根本的な罪の

問題の解決という祝福を彼に与えてくださったのです。ちょうど良い医者が根本的な問題が分かっているなら、表面的な対処ではなく、その根本問題の処置あるいは治療へと向かうように。「しっかりしなさい」と訳されている言葉は「勇気を出しなさい」とか「元気を出しなさい」という励ましの言葉です。イエス様はこうして彼が必要としている一番の問題の解決、病気の問題の根っこにある罪の赦しという祝福をくださったのです。

さてここにはイエス様の言葉を受け入れない人々もいました。3節に出て来る律法学者たちです。この頃からイエス様に対する彼らの批判的調査活動そして敵対的活動が始まって行きます。彼らはイエス様の言動を見て、「この人は神を冒瀆している」と心の中で言います。なぜなら罪を赦す権威は神にのみあるからです。罪とは何よりも神に対してなされるもの。従ってそれを赦すことができるのは神のみ。なのにイエスはここで「あなたの罪は赦された！」と勝手に宣言している。これは自分を神と等しくすることであって、神を冒瀆する発言だ！と。彼らがこのように考えた理由の一つには「罪の赦し」は本当になされたのかどうか、人の目には良く見えないという問題があります。これが今日のカギを握る部分です。もしイエス様が「罪は赦された」と言った直後に、そのことが目に見える形ではっきり示されたなら、誰も文句はつけられません。しかし罪の赦しは人の目には見えない事柄であるため証明が難しい。だからどうせこれはウソだと律法学者たちは考えた。目には見えない事柄であることをいいことにイエスは自分を神のように言い、人々をだまそうとしていると。

イエス様はそんな彼らの心の思いを見抜いて言われました。4節：「イエスは彼らの思いを知って言われた。『なぜ心の中で悪いことを考えているのか。』」そして5節のように言います。「『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。」どちらが易しいことでしょうか。本質的な点から考えれば、より簡単なのは「起きて歩け」という方です。もう片方の罪の赦しは神のみができることであって、こちらの方がレベルの高い事柄です。しかし律法学者たちの理屈に合わせれば、より簡単なのは「罪は赦された」と語る方です。なぜなら先に述べたように、それが本当に起こったかどうかを目に見えるようにして示すことはできないため、いかにもそうであるかのような振りをすることが可能だからです。しかし「起きて歩け」という言葉は気楽には言えません。その言葉を発した直後に、その言葉が本当かどうかは直ちに人々の目に明らかになるからです。そこでイエス様は彼らが難しいと考えている方の言

葉を語り、それが真実であることを示すことによって、もう一方の言葉すなわち「あなたの罪は赦された」という言葉もまた真実であることを示そうとされました。イエス様は6節で「しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために」と仰って後、中風の人に言います。「起きて寝床を担ぎ、家に帰りなさい。」するとその人はイエス様の言葉の通り起き上がり、行動しました。長い間寝たきりの人はたとえ立ち上がっても、すぐには自由に動き回れないはずですが、この人はそれまで体がマヒしていた人とはとても思えないように立ち上がり、寝床を担いで家へ帰りました。群衆はそれを見て恐ろしくなり、こんな権威を人に与えになった神をあがめたと記されています。

私たちはこの記事から何を学ぶべきでしょうか。ここにいた人々は、中風の人が突然立ち上がって歩いて家に帰って行く姿に圧倒されたと思いますが、私たちもその様子だけが頭に残るようであってはならないと思います。イエス様のこの御業の目的は6節に示されていました。すなわち「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために」ということです。ですからこのことにこそ私たちは思いを向け、またこのことにこそ驚かなければなりません。すなわちイエス様において罪が本当に赦される世界がこの地上に到来している！ということです。この罪の赦しは先程から述べていますように、私たちの目にはっきりと見える事柄ではないため、ともすると私たちも軽んじてしまいやすい。罪が赦されている人とそうでない人とはあまり違いはないかのように。確かにイエス様が山上の説教の中で「天の父は悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、雨を降らせる」と言われたように、神は今はまだある意味ですべての人を区別なく、共通の恵みの内に生かしてくださいます。クリスチャンにだけ太陽を照らして、そうでない人には光が届かないようにするといったことはしていません。しかしこのことは罪が赦されている人とそうでない人の違いはないということではありません。すべての人はこのどちらかです。罪を赦されている人か、それとも罪を赦されていない人か。そして最後のさばきの日に、そのことが重大な意味を持って来ます。ヘブル人への手紙9章27節：「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」。果たして私たちはその日に大丈夫でしょうか。多くの方は、まあ自分は大丈夫だろうと楽観的に考えているかもしれません。しかし聖書に「義人はいない。一人もいない。」と書かれています。生まれながらの状態ですべての神の前に良しと認められる人はただの一人もいない。「私たちの義はみな、不潔な衣のようです。」自分は正しい人間である、色々正しい生き方もして来たという自負心を持っていても、そんな人間レベルの義は神

の前で不潔な着物のようでしかない。罪のしみが限りなく染み込んでいて臭い匂いが漂う忌み嫌うべきものでしかない。そして最後の審判の日について、その日は「人々の隠された事柄をさばかれる日」と言われています。すなわちその日まで隠れていて顕わになって来なかったすべてのこと、誰にも知られていなかったすべてのことが明るみに出されて、神の前で調べられる。さらに私たちの罪の性質として、私たちは自分をも騙すという性質を持っています。自分にとって都合の悪いことは忘れて、割り引いて考えて、勝手に小さなこととしている。ところがそういったすべてのことがやがての日には神の前で明らかにされ、白日の光のもとにさらけ出され、私たちはその日に初めて自分自身の本当の姿を知るのです。自分は自分が思っていたよりもはるかに汚れていて、神の基準に程遠く、さばきこそふさわしい者であることを、激しいショックとともに、目を開かれるようにして知ることとなるのです。

しかし私たちにとってのグッド・ニュースは、そんな私の恐ろしいほどの罪が赦されるという世界がイエス様とともに到来しているということです。なぜイエス様とともになるのでしょうか。なぜイエス様にだけ罪を赦す権威があるのでしょうか。これはイエス様の十字架と切り離して考えることはできません。神は罪を赦す際、正義を無視し、まるで法律を撤回するかのようにしてそれをするにはできません。赦すとしたら、それはご自分の法に基づいて、その法律が要求する刑罰を完全に満たす仕方で行なわれなくてはなりません。たとえば100万円借金をして苦しんでいる人に、誰かが勝手に、あなたの借金は赦された！と宣言することはできません。しかし誰かがその借金を肩代わりしてあげたなら、その人は借金していた人に「あなたはもう払わなくて良い。私が代りに払ったから」と言って、その人を苦しみから救い出すことができます。イエス様が私たちの罪を赦すことができるのは、まさに私たちに代わって、十字架上で、本来私たちが受けるべき罪の刑罰を代わりに受けてくださったからです。しかも私たちが思うべきは、私たちの罪の借金は100万円どころの話ではないということです。それは誰も肩代わりできないほどのものです。金持ちが何百億円積んでもダメです。人間世界で考える限り、望みはどこにもありません。しかし神であられるお方が人となって地上に来て下さり、その無限の価値を持つご自身の命をささげて払われた犠牲は無数の人間たちを救い出す力を持っています。イエス様はこのような救いのみわざを成し遂げるお方として、十字架前でもこのような力を発揮しておられたのです。ご自身の死と引き換えに与える罪の赦しの祝福を、ご自分のところにやって来た中風の人に与えてくださったのです。

この祝福についての素晴らしい点をもう二つ述べて終わります。一つはこの罪の赦しは今ここで与えられるものであるということです。将来いつかではありません。イエス様はここで「子よ。あなたの罪は赦された」と言われました。このお言葉をいただいた瞬間、そのことは実現する。その時から、神の御前に罪を赦された者として、もはやさばきから解放された者として、神に近づき、神との交わりの中で育てただけの歩みが始まる。とするなら、どうしてこの祝福を受け取るのを先延ばしにする必要があるのでしょうか。イエス様に願い出るなら、その人は今日それを受け取って歩み始めることができるのです。

そしてもう一つはこの罪の赦しは私たちの一生涯に渡る慰めであるということです。私たちは罪の赦しをいただいて信仰生活を始めても日々罪を犯す者です。またクリスチャンになると、自分の罪深さが前よりもっと分かって来ます。信仰生活を続ければ続けるほど自分の醜い姿が益々見えて来ます。前よりもっと悪くなって来たときえ思うこともあります。そういう私たちは繰り返し、この恵みに生かされる必要があります。私たちは自分の罪に打ちのめされた時、これほど途方もなく、自分の内側にしっかり根付いている罪が神の御前で全く赦されているなどということは、とても考えられないことだと思うことがあります。しかし教会は常に、このイエス様のみことばに信頼して、私は罪の赦しを信じます、目には見えなくても、それがあなたの御前での事実であることを信じますと告白して来ました。使徒信条の中にも「われは聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり」と続いた後に、「罪の赦しを信じる」という部分が出て来ます。信仰を持ってもお自分には悪を行なう傾向があり、また実際にひどい罪を犯したことにより私たちの良心がひどく責められたとしても、私はキリストにあって自分が赦されていることを信じますと告白して来ましたし、今なおそうすることが許されているのです。そこに私たちの日々に新しい生活、喜びと感謝にあふれて大胆に神に近づき、神と交わる信仰の歩みが導かれるのです。

私たちはこの「罪の赦し」を知っているでしょうか。目には見えないことですが、神の前で赦されて歩む喜びとすがすがしさに日々生きているでしょうか。イエス様はご自分に近づく者を決して見捨てません。今日の箇所です。イエス様のところにやって来た人に対してもそうだったように、イエス様はその人にこう言って下さいます。「子よ。しっかりしなさい。あなたの罪は赦された。」 この罪の赦しを早くに自分のものとしていただいて、神との交わりに生きる生活、そしてやがての天の御国へと至るいのちの歩み

へ進んでいきたいと思ひます。